

# 学会受賞報告

## 最優秀ポスター賞

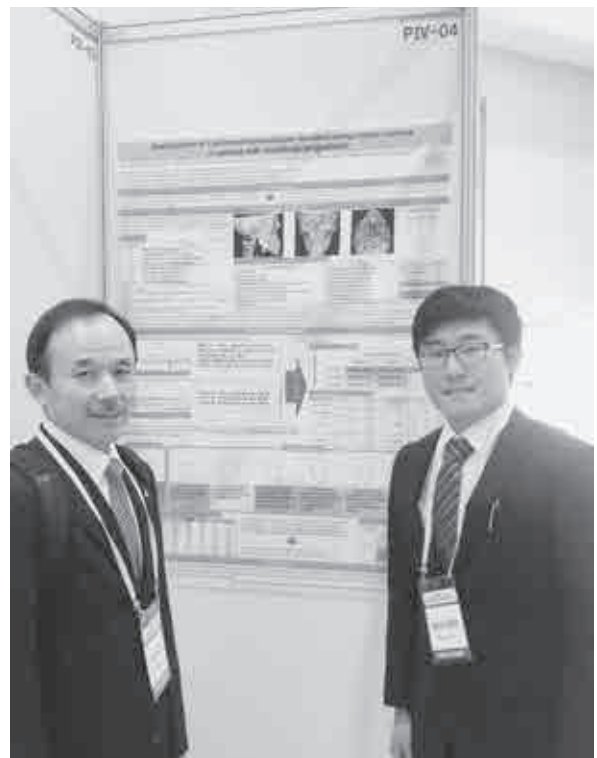
### The 58<sup>th</sup> Congress of the KAMPRS (Korean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeons) にて最優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正分野 大澤 知 朗

この度、The 58<sup>th</sup> Congress of the KAMPRSにおいて最優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告致します。演題名は、「Classification of 3-dimensional mandibular deviation using cluster analysis in patients with mandibular prognathism」です。骨格性下顎前突症患者の顎偏位の指標に、Meの水平偏位量が用いられてきたが、顎偏位様相は多様性に富んでおり、不明な点が多い。そこで、三次元的下顎骨形態計測を行い、下顎骨形態と頭蓋底に対する下顎頭の位置の2つの観点から、クラスター分析を用いて顎偏位の定量化と分類を試みた。また正面セファログラムにおけるMeの水平偏位量と三次元的下顎骨形態との相関についても検討した。結果は、下顎骨形態と頭蓋底に対する下顎頭の位置の2つの観点から対象の分類を行い、顎偏位の特徴が異なる7つのグループに分類できた。またMeの水平偏位量は、下顎骨形態と一部相関を認めるが相関係数が低く、顎偏位の把握には、Meの水平偏位量のみでは不十分であることが分かった。

最後となりますが、ご指導を賜りました齋藤功

教授、高木律男教授、小林正治教授、西山秀昌先生、丹原惇先生、高橋功次朗先生、ご意見を頂きました先生方にこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



## 第78回 日本矯正歯科学会・学術集会 優秀発表賞 受賞報告

歯科矯正学分野 網 谷 季莉子

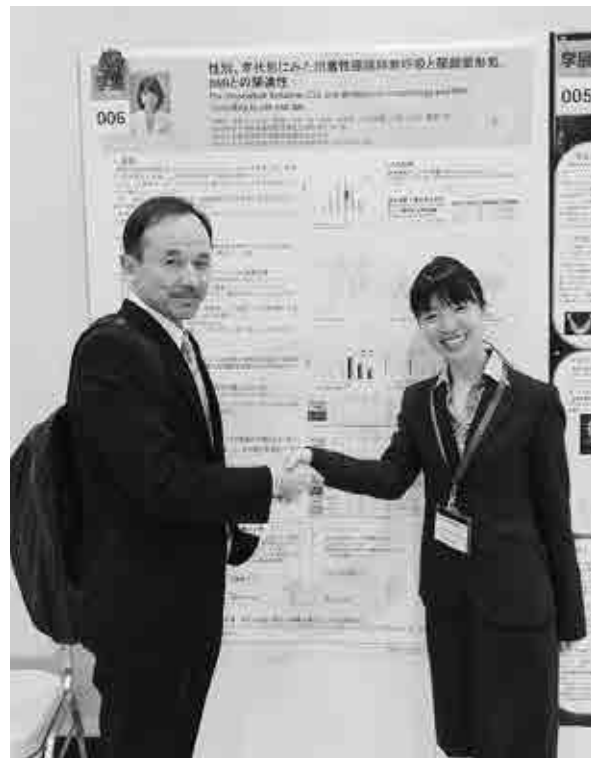
この度、2019年に長崎市で開催された第78回日本矯正歯科学会・学術集会にてポスター発表の優秀賞を受賞しましたのでご報告致します。

演題名は「性別、年代別にみた閉塞性睡眠時無呼吸と顎顔面形態、BMIとの関連性」です。閉塞性睡眠時無呼吸（Obstructive Sleep Apnea: OSA）は男性に多い疾患ですので、男性患者を対象にした研究は過去にも数多く報告されていますが、一定数みられる女性患者についての報告は少なく、未だに不明な点が多いというのが現状です。そこで本研究では、成人のOSA患者男性56名、女性56名を対象として、顎顔面形態、BMIに着目し、性別および年代別にOSAの病態を明らかにすることを試みました。

その結果、性別間、年代間においてOSAの病態に関する特徴が異なることが示され、今後OSAに対する治療については性別や年代による要因の差に配慮した検査方法や治療法を模索する必要があると考えられました。

多くの素晴らしい研究発表の中から選んでいたいただき大変光栄です。今回の受賞を励みに、臨床・研究に精進したいと思います。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、竹山雅規先生、口腔再建外科の小林正治教授、呼吸器感染症内科の大嶋康義先生に心から御礼申し上げます。



## 第78回 日本矯正歯科学会・学術大会 優秀発表賞受賞報告

歯科矯正学分野 長 崎 司

この度、第78回日本矯正歯科学会・学術大会において、優秀発表賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。演題名は「舌圧と顎顔面筋群の筋活動同時測定による嚥下時運動解析法の有用性」です。

骨格性下顎前突症患者の嚥下運動は、健常者と比較すると経時的变化に協調性がないため、舌運動と口唇・頬部軟組織の運動を同時測定し、時系列的関係性を検索することで、機能的診断の新たな指標となるのではないかと考え、本研究を立案

しました。結果、骨格性下顎前突症患者では、上下顎骨の形態的不調和により舌の後上方への挙上  
が困難であること、それを補うために口蓋周縁部の舌圧持続時間および顎顔面筋群の筋活動時間の延長が生じていることが示唆されました。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、福井忠雄先生、小野高裕教授、堀一浩准教授、ご意見をいただきました歯科矯正学分野の先生方に心から厚く御礼申し上げます。



## 歯科基礎医学会 学会奨励賞受賞報告

微生物感染症学分野 土門 久 哲

令和元年 10 月に東京で開催された第61回歯科基礎医学会学術大会において、学会奨励賞を受賞しましたのでご報告いたします。

肺炎および誤嚥性肺炎は、わが国の死因のそれぞれ5位と7位を占めており、その死亡率は高齢者ほど高いことが知られています。高齢社会を迎えた今日において、肺炎を予防・治療することは重要な課題であると考え、当研究室では肺炎の基礎的研究を行っています。

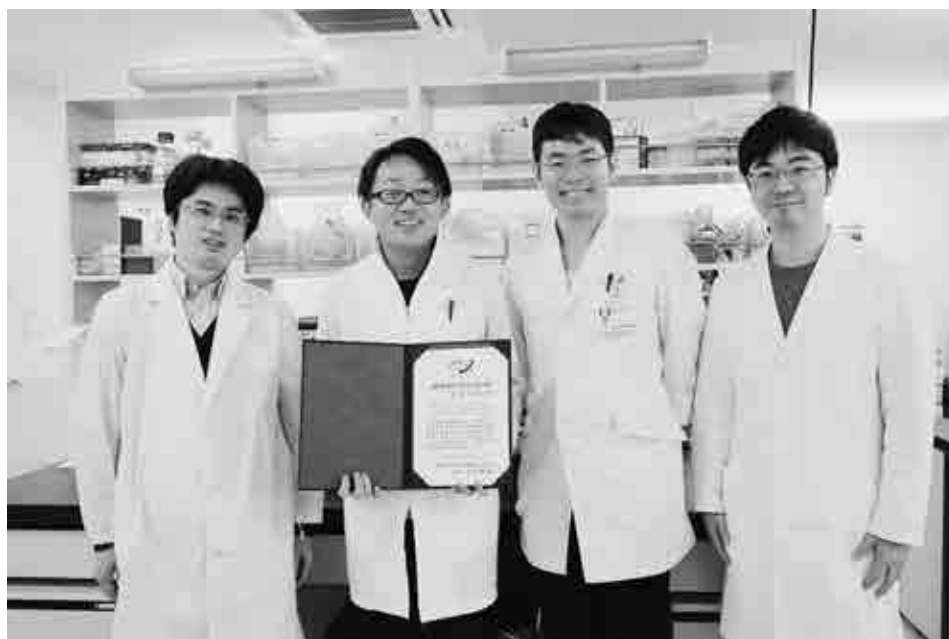
肺炎の主な原因菌である肺炎球菌に感染すると、免疫細胞が肺組織へ大量に浸潤するにも関わらず、肺炎球菌を十分に排除できずに重症化する例が報告されています。受賞論文ではそのメカニズムとして、①肺炎球菌が免疫細胞を破壊し、細胞内部からプロテアーゼを漏出させること、②漏出したプロテアーゼが宿主（肺炎患者）の自然免

疫系の受容体を分解し、免疫機能を弱めることを報告しました。

台風19号の影響で学会の開催自体が危ぶまれましたが、受賞講演には多くの先生方に参加いただき、活発なディスカッションをすることができました。また、他分野の先生方とも知り合うことができ、有意義な学会となりました。

最後になりますが、研究指導いただいた寺尾豊教授および研究協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

受賞論文：Neutrophil Elastase Subverts the Immune Response by Cleaving Toll-Like Receptors and Cytokines in Pneumococcal Pneumonia. *Front Immunol*, 9: 732, 2018.



## 学会受賞報告 国際学会研究発表奨励賞

歯科総合診療部 医員 佐藤 拓実

この度、「The Motion Analysis of Cavity Preparation」と題して2018 IADR/PER General Session & Exhibitionにて行ったポスター口演が、第38回日本歯科医学教育学会総会および学術大会にて、第11回国際学会研究発表奨励賞を受賞しましたので報告させていただきます。

窩洞形成は日常歯科臨床において高頻度に行われる手技ですが、適切な形態付与を行うためには高度な技術を必要とします。従来からこのような臨床技術は経験を重ねることにより修得されることが一般的です。またその手技の評価は専らそのアウトカムの評価によって代替的に行われてきました。

本研究では窩洞形成時の頭部、体幹、上肢の動作とエアタービンに備え付けたダイヤモンドポイントの軌道を経時的に計測・解析することで、臨床技術すなわち動作そのものの評価を可能とすることを目的としました。また熟練者と学習者、安定姿勢と不安定姿勢との比較を行うことで、適切なタービンコントロールの要を見極めようと試みました。結果の多くは臨床実感に伴うものでしたが、一方で予想しない結果も認められました。しかしながら、いずれも各群間での相違は極小さなスケールにとどまり、日常臨床で行われるような

肉眼における評価や指導は難しいことが示されました。

このような賞をいただいたことを励みとして、今後も研究活動を続けていきたいと思っております。最後になりますが、ご指導を賜りました藤井規孝教授、並びに工学部工学科 林豊彦教授をはじめ、共同研究者の皆様にご心より御礼申し上げます。



## 第12回日本総合歯科学会学術大会優秀口演賞受賞報告

歯科臨床教育学分野 原 さやか

この度、2019年11月に北海道で開催されました第12回日本総合歯科学会学術大会におきまして、「歯科治療時の力のコントロールの個人差についての検討」の演題にて優秀口演賞を受賞しましたので、ご報告致します。

本演題では、研修開始直後の研修歯科医を対象に、性別や握力の強さの違いが、患者や患歯に加える力のコントロールに及ぼす影響に着目し、検証を行いました。検証の結果、歯科処置の種類によっては、性別や握力の強さが力のコントロールに影響する可能性があることが示唆されました。

術者の身体能力によって、力のコントロールに違いがあることはわかりましたが、現状ではそれを可視化することはできません。したがって、このように文章や言葉だけでは伝わらないような感覚的な領域に関する教育では、どうしても教育する側の主観的な評価に頼らざるを得ません。当分野ではこのような現状に鑑み、客観的な評価方法の検討や、その評価に基づいた個人差に合わせた教育方法の開発を目指して研究を行っています。限られた時間を過ごす臨床実習や臨床研修の中で、少しでも効率的に多くのことを習得できるようなシステムの開発を目指していくことができ

ばと思っております。

最後になりますが、日々多大なるご指導をいただいております藤井規孝教授ならびに歯科臨床教育学分野・歯科総合診療部の先生方、そして研究に協力いただいた研修歯科医の先生にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。



## 受賞報告

総合臨床研修センター 研修歯科医 金岡 沙季

この度、2019年11月に開催されました第12回日本総合歯科学会において、最優秀若手ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

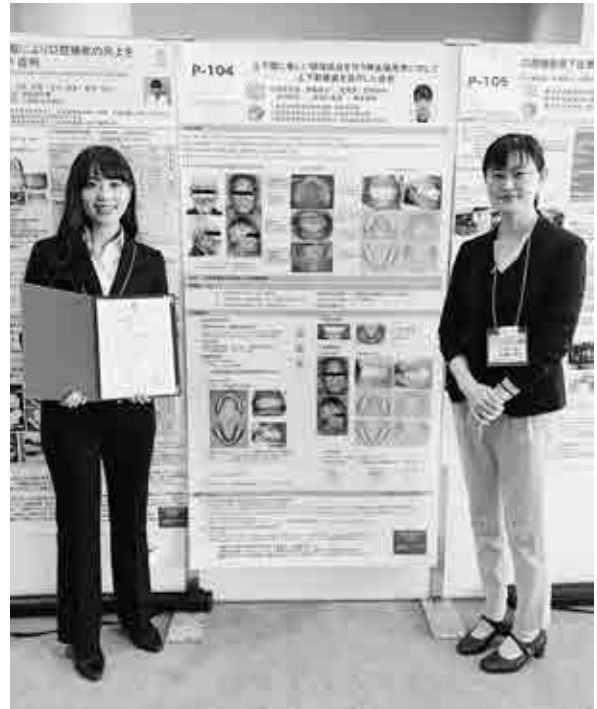
演題名は『上下顎に著しい顎堤吸収を伴う無歯顎患者に対して上下新義歯を製作した症例』で、ポスター発表をさせて頂きました。下顎義歯の浮き上がりを主訴とする無歯顎患者に対して、問題点とその対応を検討しました。通法通りの手順に加え、ピエゾグラフィを用いて人工歯の排列位置や義歯研磨面形態を決定し、交叉咬合排列として蝸義歯試適を行った後、咬合圧印象を採得しました。完成した義歯は調整後、良好に経過しています。本症例を通し義歯床の形態や人工歯の排列が義歯の安定に大きく影響する事を実感できたことは研修医としてとても良い経験となりました。

初めての学会発表ということもあり、当日はズラリと並んだポスターを前にすると、緊張感が一層高まりましたが、沢山の方から頂いた激励のお言葉を思い出し、さらに、医局の先生方が見守ってくださる中でしたので安心して発表をすることができました。

このような大変貴重な機会を与えていただき、また、ご多忙の中ご指導くださいました藤井規孝

教授、伊藤晴江先生をはじめとする歯科総合診療部の先生方ならびにご支援いただきました全ての先生方に心よりお礼申し上げます。

今回の経験を今後も活かしていけるよう、日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



## 第12回日本総合歯科学会学術大会 優秀ポスター賞受賞報告

総合臨床研修センター 研修歯科医 小 海 由 佳

この度は、2019年11月に北海道で開催されました第12回日本総合歯科学会学術大会若手ポスター賞におきまして優秀ポスター賞を受賞しましたのでご報告致します。

演題名は「口腔機能低下症患者に対する治療計画立案の経験」です。

平成30年度の診療報酬改定後、当院では今年度より該当初診患者さんに対して口腔機能検査室の運用が開始されました。本症例の患者さんは検査を希望され実施したところ、7項目中、口腔乾燥、咬合力低下、舌圧低下の3項目が該当し口腔機能低下症と診断がつかしました。それぞれの原因として全身的既往の糖尿病、主訴である義歯、加齢変化を挙げ、改善策として治療状況やHbA1cについて聴取による全身疾患の把握、義歯の新製、そして、検査室の口腔リハビリテーション科の先生にご教授いただき口腔体操や唾液腺マッサージの指導による口腔機能管理を行いました。

本症例では初診時に検査を実施し、診断がついたことで治療計画に口腔機能管理を盛り込むことが出来ました。これらの経験から、検査の重要性や義歯製作のみに主眼を置くのではなく、義歯の不具合の背景について、総合的に考察するという広い知見、そして口腔機能低下症患者への対応方法について学ぶことができました。

また、学会での発表を経験し、歯科から医科へのアプローチやオーラルフレイルに対する理解の重要性をご指摘いただき、私もまだまだ視野が狭

くなりがちであることを痛感致しましたので、今後もより一層研鑽を積みたいと思います。

最後になりましたが藤井規孝教授をはじめ、指導医の石崎裕子先生、歯科総合診療部の先生方、学会参加のためのサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、そして発表までの間協力してくれた同期の研修歯科医の皆さんにこの場を借りて深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。





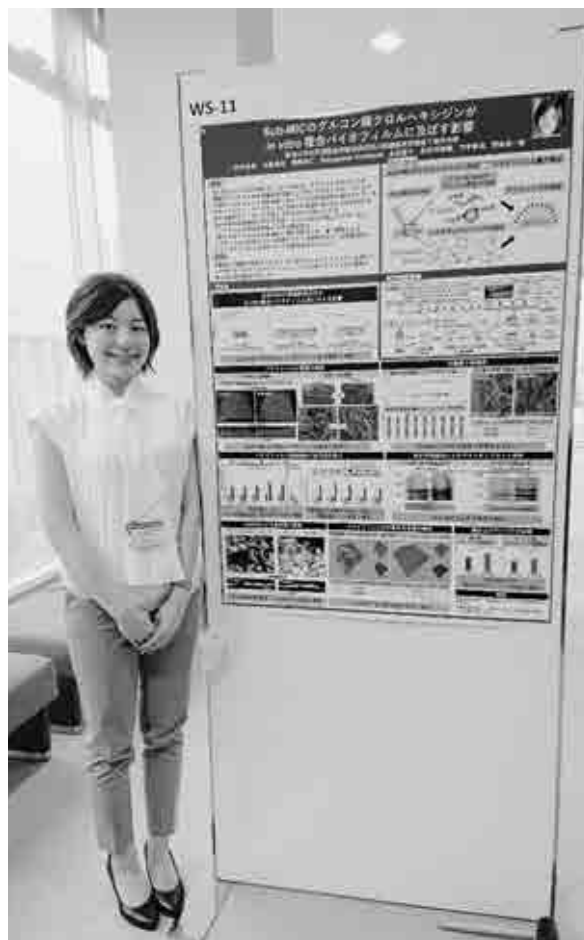
## 第33回 日本バイオフィルム学会学術集会 若手ワークショップ優秀発表賞 受賞報告

う蝕学分野 鈴木 裕 希

この度、2019年7月に久留米にて開催されました第33回日本バイオフィルム学会学術集会におきまして、「Sub-MICのグルコン酸クロルヘキシジンがin vitro複合バイオフィルムに及ぼす影響」と題した発表で優秀発表賞を受賞いたしました。

本研究では、う蝕関連細菌種からなるin vitro複合バイオフィルムモデルを用いて、最小発育阻止濃度未満（sub-MIC）のグルコン酸クロルヘキシジン（CHG）作用時のバイオフィルム形成促進機構について検証しました。その結果、sub-MICのCHGは、*Streptococcus mutans*のバイオフィルム形成関連遺伝子の転写に影響を与えることで、複合バイオフィルム形成を促進させることが示唆されました。今後は、in situ口腔バイオフィルム解析モデルなどを用いた、より口腔環境に近似した条件での検証が必要であると考えます。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました野村由一郎教授、竹中彰治先生、大墨竜也先生、ご意見をくださいました先生方に心よりお礼申し上げます。



## 日本歯科保存学会学術大会 専門医優秀症例発表賞 受賞報告

う蝕学分野 大 墨 竜 也

2019年11月に福岡にて開催されました、第151回日本歯科保存学会秋季学術大会におきまして、「非穿孔型の広範な歯根内部吸収を認めた上顎右側中切歯の1症例」と題したポスター発表にて専門医優秀症例発表賞を受賞致しました。

第150回という区切りの前回大会より、専門医・認定医優秀症例発表賞が設けられました。これは、患者国民が期待する質の高い治療法や機器等の活用法についての情報共有を図ることを目的とした、修復、歯内、歯周の保存領域に関連した症例報告を表彰する制度になります。

歯内療法分野において、歯根吸収は、日常臨床で遭遇する頻度はそこまで多くはないものの、その対応に苦慮することが多い症例です。臨床的には、外傷の既往のある歯などに無症状で進行するため、隣在歯等のX線検査で偶然発見されることが多く、歯根吸収の進行状況によっては、抜歯となることも少なくありません。診断には、歯科用コーンビームCT（CBCT）が有用であり、治療方針の決定に大きく寄与します。さらに、マイクロスコープの使用により、これまで困難であった処置も可能となり、保存できる可能性が広がったと考えています。

今後も、これを励みに、エビデンスに則った治

療を根本におき、日常臨床に還元していきたいと考えております。本発表に際し、ご指導賜りました、野杵教授、竹中助教にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



# Excellent Poster Presentation Award at the 1<sup>st</sup> General Meeting of the Asian-Oceanian Federation of Conservative Dentistry-ConsAsia 2019

Traithawit Naksagoon (2<sup>nd</sup> year graduate student)  
Division of Cariology, Operative Dentistry, and Endodontics  
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences



Greeting to all members of Dental School, Niigata University, my name is Naksagoon Traithawit (ナークサクン トライタウイット). I am from Thailand and I have studied at this graduate school since October 2018. Now, I would like to deliver a pleasant news to all of you. At the 1<sup>st</sup> General Meeting of the Asian-Oceanian Federation of Conservative Dentistry - ConsAsia 2019 (in accordance with a KACD-JSCD 21<sup>st</sup> Joint Scientific Meeting) which held on 8 - 10 November 2019 in Seoul, South Korea, I have received "Excellent Poster Presentation Award" with the research title "Anti-cariogenic Biofilm Effect of Zinc Glass-containing Glass Ionomer Cement After Long-term Water Immersion Using In Vitro MRD Flow Cell

Study" My research is to assess the effects of water aging to a novel GIC containing fluoro-zinc-silicate filler on anti-cariogenic biofilm properties. It was an honorable moment of my life since I have started my career and I would like to thank Dean of Faculty of Dentistry (Prof. Maeda) and Prof. Noiri for accepting me to study in this school and supporting this research, my advisers (Ohsumi sensei and Takenaka sensei) who always take care, give good advices and kindly helps throughout this research and also all the members of Cariology Division. Please continue support me along the way in the future. Thank you very much.